

Nara Women's University

[平成20年度スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書 第4年次 VII 資料 運営指導委員会記録]

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学附属中等教育学校 公開日: 2009-12-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奈良女子大学附属中等教育学校 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1060

運営指導委員会 記録

運営指導委員会は、大学教員・研究者・学識経験者・教育委員会指導主事等で組織し、専門的見地から SSH 全体について、指導・助言・評価をする。運営指導委員には、SSH 生徒研究発表会に参加していただき、様々な指導や助言、評価を行ってもらい、今年度の第 1 回運営指導委員会とした。第 2 回および第 3 回の運営指導委員会は、下記の通りに実施した。

■ 第 2 回運営指導委員会実施概要

SSH において継続的に取り組んできた、理科および数学のカリキュラム開発の現状を報告すると共に、今年度の重点課題である国際連携に関する事業の報告を行った。カリキュラムに関しては、特に評価方法に関する意見が交わされた。また、国際連携に関しては、英語によるコミュニケーションの大切さについて意見が交わされた。

日 時	2008 年 12 月 5 日 (金) 15:00 ~ 17:30
場 所	本校会議室
参加者	本校；副校長 2 名、教頭、理科、数学科および生活科学関係教員、教育課程委員(本校教員) 運営指導委員：森本弘一(奈良教育大学)、吉田明史(奈良教育大学)、小林 毅(奈良女子大学)、塚原敬一(奈良女子大学)、上野健爾(京都大学)、丹羽雅子(奈良女子大学)
構 成	① 本年度の概要説明 ② 台湾 ISSS の報告と成果 ③ リテラシーの評価テスト/分析と考察 ④ インタビュー評価 ⑤ 運営指導委員からの助言

(1) カリキュラムに関する運営指導委員の意見

- ・ 理科の評価テストの実施前に「予想正答率」を設定したのは非常に良かった。
- ・ 理科は、問題を解く楽しさと、問題を見つけるおもしろさがある。学校教育では前者しかない場合が多い。後者をプロセス 3 として授業に取り組んでいく姿勢は非常に野心的で良い。ただし、仮説の立案に疑問から検証可能な問題に変換していく作業は、その因果関係・疑問の構造化が必要となり、非常に高度である。疑問と問題をはっきり分けて教育する必要がある。
- ・ 数学カリキュラムを分析するために必要な観点を求める前に、まずは何を数学リテラシーとして定義するかを数学教員でしっかり議論して、定義すべきである。そこから派生する因子が、分析に必要な観点になる。

(2) 国際連携に関する運営指導委員の意見

- ・ 生徒がもっていた英語に対する恐怖感が和らいだという点は、評価できる。しかし、国際学会における日本人の英語力の低さは目に余るものがある。コミュニケーションに必要な英語力は毎日のトレーニングが必要である。国際連携を標榜するなら、この力のたゆまない育成は、セットであって欲しい。
- ・ ビデオでも生徒が語っていたが、参加したサイエンス研究会のメンバーは、それぞれに研究成果を持っている。そうした生徒が参加したからこそ、成功したと思う。

■ 第3回運営指導委員会実施概要

今年度のSSH重点枠研究である「国際連携」の一環として、韓国教員と本校教員、運営指導委員、奈良県教育委員とで研修交流をし、「スーパーな」生徒の育成について研究発表及び意見交換をした。日本と韓国相互にとって、非常に刺激があり学びの多い会であった。

日 時	2009年1月30日(金) 13:00～17:00
場 所	本校多目的ホール
参加者	本校；副校長2名、教頭、理科、数学科教員、教育課程委員(本校教員) 韓国；高校教員20名、教育委員会2名、大学関係者3名 運営指導委員；重松敬一(奈良教育大学)、吉田明史(奈良教育大学)、小林 毅(奈良女子大学) 本学教員；植野洋志(奈良女子大学) 奈良県教育委員会
構 成	① 開会挨拶 ② セミナー 韓国の英才教育・日本のSSH概要と本校SSHの特色(質疑応答・休憩) 韓国の英才教育の実際・SSHサイエンス研究会の指導 全体討議・指導助言 ③ 校内見学およびSSHサイエンス研究会の生徒活動の見学 ④ 閉会挨拶

(1) 運営指導委員および本学教員のコメント

- ・ 韓国の科学学校と本校のSSH活動には共通性があると感じた。生徒は、すぐに正しい結果を求める傾向がある。しかし、そこをあえて「どういう結果になるんだろうな?」「どうして失敗したんだろう?」などと、考えさせる教育活動を評価したい。
- ・ 高等学校においては、韓国の教育方針と日本の教育方針の違いを感じた。韓国は国を挙げてひとつの方向に向かう科学教育であり、日本は学校ごとの特色を生かした科学教育となっている。
- ・ 100年に一人の逸材を生み出し、その人が世の中を変えていくこともありえると思う。日本と韓国のどちらが良いというわけではなく、互いに良い部分を取り入れて、よりよい教育を目指していくことが大切であろう。
- ・ 生活科学と呼ばれる科目がスタートしている。これは、第2のニュートンを作りたいという目的に沿っている。このような学年の壁を越えた教育活動にも本校は参加していることを大切にしていきたい。

(2) 韓国教員のコメント

- ・ 日本のSSHの取り組みや、エネルギッシュな理科の先生の話聞くことができ、非常に参考になった。今はグローバルな社会に対応できる生徒を育成しなくてはならない。そのためには、まずは教師がグローバルな社会に対応できる人物に成長する必要がある。
- ・ こうした研修会が、互いに及ぼす刺激は大きいと思う。今後もぜひ交流を続けていきたい。韓国でも理科嫌いは顕著な問題である。そのために国をあげて対策を練っているが、対策が見つからないのが現状である。こうした交流が、その打開策を得るひとつのヒントになれば良いと考えている。今度はぜひ、韓国に来て韓国の現状を見て欲しいと思う。

なお、第4回運営指導委員会を2009年2月21日(土)の本校公開研究会において開催した。